

質疑応答 1

ひらい じゅんこ
平井 潤子
やまぐち ちづこ
山口 千津子
かわかみ なおや
川上 直也



平井



それでは、私からお答えする質問です。たくさんのご質問、ありがとうございます。

Q 警戒避難区域内にどのくらいのペットが残っているんですか？

これにつきましては、先ほどもご報告申し上げたように、例えば、畜犬登録数が分からない状況になって

いるであるとか、猫に関してはもともと登録制ではないので、飼養頭数が明確に分かっていないという問題の他、私どもが福島県で救護した動物数に関しては把握しておりますが、民間のグループで、現地から救出された方々の保護頭数というのが分からないために、正確には、「どのくらい残っているのかは分かりません」というのがお答えになります。

ただ、5月1日から8月26日までの間に実施された一時帰宅に併せた保護活動において、福島県で保護・回収したペットについては、犬が302頭、猫が190頭という数となっております。そして、警戒区域内に1回立ち入るごとに動物を見掛ける数が減ってきているということをご報告受けております。ただ、今も残っている動物がいることは確認しており、今後どういう方法で保護していくかということは、とにかく一生懸命、考えていきたいと思っております。

また、長期化する避難生活、今後、重要になってくることは何かということなのですが、本当にそれが一番の課題ですね。これは私の個人的な見解でもありますが、何がその子と飼い主様にとって一番ハッピーなのかということをまず考えたいと思っております。

一番の理想は、その子がまた元の飼い主様と、元通りの生活になるということなのではないかと考えるのですけれども、そのためには、動物援護、例えば、物資の提供であるとか、保護期間を長くしたりということだけではなく、飼い主様自身の生活が再建できなければ、そのペットを手元に引き取り、また一緒に生活してあげることができないものですから、この

問題を人への支援を含めて考えていかなければなりません。そのためには、動物に関する活動をする人だけでなく、いろんな関係の人たちが集まって考えていかなければならないのではないかと考えています。

また、今回、東日本大震災についてのご質問を受けておりますけれども、実際には、先日の台風で、和歌山でも大きな被害が出ておりますし、また、宮崎の新燃岳でもまだ避難生活を送ってらっしゃる方がおられます。そういった災害救援とか、私たち個人にできる支援についても、新しい災害が起こったらそっちに全部気持ちが移ってしまうのではなく、現在も避難されている方を常頭に置いて、長期的な支援をしていくことが、私たちにできることなのではないかと、これは個人的な意見ですけれども、考えております。

Q ボランティアの募集はどういうふうに行っていますか、どうやったらできますか？

うれしいご質問です。これに関しましては、現在では福島動物救護本部、それから、石巻の救護センターなどでボランティア募集を継続的に行っていますので、ホームページなどを参考にさせていただいて、条件や可能な参加方法をお問い合わせいただければと思います。

また、今回の災害においては東京都が予算を取ってくださいます、日野市に東日本大震災の被災動物を保護するシェルターを作ってくださいということで、10月11日からの開所を予定しております。こちらでもボランティア募集を開始致しますので、ぜひ東京都の広報やこちらのホームページで確認をしていただければと思います。

あと、しつけで大事なことは特に犬の場合になるかと思いますが、先ほど、川上先生からのお話にもありましたが、社会性を育てることだと考えます。圏内に入った皆さんが口々におっしゃるのは、「近寄ってきてくれれば、なんとか保護できるのに」ということです。やはり人を警戒して逃げてしまう動物がどうしても保護が難しいという問題です。それから避難所でも、誰にでもここにこしてしっぽを振ってられるような犬が、避難されているみなさんにかわいがられてる

ケースもあるんですね。そういった点では、犬の社会化、誰にでもいい子でいられるというしつけは、飼い主様ならではの平常時からの防災対策だと思いますので、ぜひ取り組んでいただければと思います。

山口



それでは、私のほうに回ってまいりました質問にお答えさせていただきます。私どものほうも、マイクロチップについてのご質問がいくつかございました。

Q マイクロチップについて

まとめてお話しさせていただきますと、今回、いろいろ被災地に行っておりまして、もしもマイクロチップが入ってたら飼い主がすぐ分かったらというケースがとてもあるんですね。首輪に迷子札を付けます。迷子札は外から見えますので、私たちもいつも「迷子札を付けてください」というふうに言っているんですけれども、ガリガリにやせて首輪がすぽっと抜けてしまったりとか、あるいは津波でなんとか生き延びた場合というのは、首輪が取れてしまっている場合が結

構ありまして、そのときに、マイクロチップが入っていれば、首輪が取れても飼い主が分かって、元の飼い主に戻れるだろうなというふうなケースが結構あります。

ただ、残念ながら被災地での普及度はかなり低くて、マイクロチップを入れている動物が本当に少なかったということも、今回、はぐれた動物が飼い主と会えていないということに繋がるかなと思います。

ただ、東日本大震災を受けて、マイクロチップを入れなきゃというふう考えた方が意外と多くて、今までなかなか伸び悩んでいた頭数が、45万頭ぐらいまで伸びたというふうに聞いております。ただ、45万頭というのは日本全国を考えればまだまだの頭数です。マイクロチップは小さくて、飼い主の情報がいろいろ入っているもので、それを首の皮下に埋めます。また、ほとんどの自治体はリーダーを持っております。ほとんど全国ですね。全国の自治体がリーダーを持っておりますから、自治体に行けば読んでいただいて飼い主が分かります。そうすれば、すぐ飼い主の元に連絡が行きますので、やはりこういう大震災のようなときにはかなり効力を発揮するのではないかなと思っています。ぜひ、これはもっと普及させていかなければならない個体識別の方法だろうなと思っています。

放射線量のことがありまして、なかなか放射線量の高い地域には、行っていただけないということがあります。そこがとても悩ましいところで、早く放射線量が誰でも入れるような値にまでなっていってくれたらなというふうに思います。それでは、川上先生にバトンタッチしたいと思います。

川上



私のほうから3つの質問にお答えさせていただきたいと思います。

Q

仮救済本部の立ち上げや災害時の食料の備蓄、行政を巻き込んだ対応はどういうふうに行政を説得したらよいですか？

よく私はお話し申し上げますが、皆さんから「行政に対して、こうやってください、ああやってください」というお話が実はあります。もちろんそういう意見は大変大切なことだと思いますが、これは、行政がやるだけではなくて、一緒にやりましょうということ、ぜひお話をいただければなと思っています。

これは、何かがあると、「あのときは行政が動いてくれました」というお話をされますが、そうじゃなく

で、「みんなで一緒にやりましょう」ということです。「私たちがやる、行政もやりましょう」ということで、ぜひそういうアプローチの仕方をしていただければ、必ず一緒にやっていけると思っています。

Q

現在、どれぐらいのフードなどを保管していますか？

今、実は5カ所の保護管理センターに分散して保管しています。これは、1カ所が被災しても、他でカバーできるということで、少しずつ分散しております。ただ、ケージなんかの大きな物については1カ所で保管しておりますが、数個ずつ、各保護管理センターで分散して持っています。

Q

家畜の救護について

それから、家畜の救護ということですが、牛は家畜とペットと2種類ありました。

1つは闘牛です。闘牛は、家畜ではなくペットなんです。それは、やっぱり村と一緒にやって対応を取ることです。基本的には、飼育者が責任を負わなければならないということになります。

それから、家畜は飼育者がヘリで全部下ろしました。最後に、「さっきの本、よく教えて」というお話がございました。タイトルが、「地震の村で待っていた猫のチボとハル」という本です。取材をしていただいて、私どもの活動も全部ここに入っています。出版社が「ハート出版」というところです。著者が池田まき子さんって方ですね。ぜひ、読んでいただければうれしいです。以上でございます。ありがとうございます。

Q

動物看護師の活動について

それからもう1つ、これもうれしいお話なのですが、獣医師の方がいろいろ活動していらっしゃるんですが動物看護師の方々はどのようなのでしょうかという質問がありました。この書いていらっしゃる方から、自分たちもお手伝いしたいというお気持ちがいじみ出てきているようで、とてもありがたいです。

宮城とか、岩手とか、先程の石巻辺りでも、たくさんの動物の看護師の方々が、獣医師と一緒にお手伝いに来てくださっています。動物看護師の方々は、やはり動物の専門家としていろんなことを学ばれていますので、こういうときにはとてもお役に立てていただいて、ぜひぜひ参加していただきたい方々だというふうに思っております。

ただ、福島の方にもぜひ来ていただきたいのですが、

